

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 14 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520954

研究課題名(和文)ベトナムにおける韓国人ディアスポラの融合・隔離・妥協

研究課題名(英文)Korean Diaspora in Vietnam: Assimilation, Segregation and Compromising

研究代表者

金 とう哲(KIM, DOO-CHUL)

岡山大学・その他の研究科・教授

研究者番号：10281974

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ホーチミン市に居住する韓国人ディアスポラの属性と彼らの定住意識を明らかにすると共に、彼らのホスト社会と融合・隔離・妥協について現地調査を行った。調査の結果、就業目的の移住が最も多く、居住期間は5年未満が約半数を占めていた。ベトナム語能力は片言の会話程度の初級レベルが大半で、日常生活にも不自由を感じているが、約6割の人々がベトナム生活に満足していた。居住地域は外国人集中地区であるPhu My Hung地区をはじめ数カ所に限られており、空間的な隔離が進んでいることがわかる。また、韓国人とベトナム人のカップルで形成する「韓ベ家族」を除けば、定住意識は総じて低い水準であった。

研究成果の概要(英文)：This research aims to clarify the characteristics of Korean diaspora living in Hochiminh City, Vietnam, and their social and spatial assimilation, segregation and compromising processes as well. The Korean diaspora living in Hochiminh City are characterized as follows: the majority of them immigrated in order to find a new business chance or a job; those who have been staying in Vietnam less than 5 years occupy more than 50%; their Vietnamese language abilities are not good enough, however, more than 60% of them satisfy with the living in Vietnam; Most of Korean diaspora living in Hochiminh City concentrate in a specific area such as Phu My Hung, a famous foreigners' new town, with accelerating spatial segregation. As a result, most of them regard themselves as a temporary resident except so-called a "Korea-Vietnam Family" which is consist of a Korean and Vietnamese couple.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学

キーワード：韓国人ディアスポラ エスニック 隔離 妥協 ベトナム

1. 研究開始当初の背景

ベトナムのホーチミン市には東南アジア最大の韓国人コミュニティが形成されている。ベトナム政府が外国人居住者数を公表していないため、正確な数は把握できないが、現地の韓国公館の推計ではベトナム全国に約10万人以上の韓国人が住んでおり、そのうち約9万人がホーチミン市とその周辺に済んでいるとされる。また、ホーチミン市内には移住動機や時期を異にする韓国人集中地域が5箇所も形成されている。ところが、ベトナム政府は外国人の移民を認めていないので、駐在員やその家族を除く在越韓国人の多くの法的地位は中短期滞在である。しかし、実際のところ、ベトナムに居住する韓国人の多くは、家族ぐるみで新たな生活基盤を求めて移住してきたいわば「移民」であり、自営業・中小企業などを営みながらホストコミュニティであるベトナム人社会と日常的な相互作用を行っている地域社会の構成員なのである。

一方、ホーチミン市日本商工会によれば、ホーチミン市とその周辺に居住する日本人は1万人前後と推定され、その多くは駐在員やその家族であるらしい。このような推察はホーチミン市日本人学校と同韓国人学校の規模と学級編成からも裏付けられる。日本人学校は小学校と中学校のみで構成されているのに対して、韓国人学校は1学年約200人規模の高校まで備えたホーチミン市最大規模の外国人学校となっている。つまり、日本に比べて約1/3の人口規模を持つ韓国からの移住者数が、ホーチミン市居住日本人数の約10倍に上っているのである。

その結果、ホーチミン市における韓国人コミュニティは群を抜いて最大のエスニック集団となっており、ハンゲルで書かれた看板など街の景観からもその存在感は容易に読

み取ることができる。

では、なぜ、これほど多くの韓国人が、一人あたりGDPでは約1/20の水準のベトナムに移住しているのか。報告者は拙稿(2003)で最近の韓国人ディアスポラの特徴として、「高学歴で中産階級のホワイト・カラー出身であり、子供の教育環境ときれいでゆとりある生活環境をもっとも重要な移住動機として挙げている。このような社会経済的属性や移民の動機は、低い社会経済的ステータスと経済的理由といった従来の韓国人移民とは明らかに異なっており、新しい韓国人ディアスポラを象徴するもの」であると指摘したことがある。このような傾向は今でも続いている事実であり、韓国人ディアスポラの主要な流れを成していることに変わりない。しかし、ベトナムにおける韓国人ディアスポラは社会経済的な属性が多様で、子どもの教育やよりよい生活環境では移住動機の説明ができないなど、最近の韓国人ディアスポラの動向とは全く異なるものと言って良い。持続的な成長を続ける祖国を離れて慣れない途上国に、しかも一世代前には戦闘を繰り広げていた「敵対国」のベトナムに移住する「彼ら」はどのような人々で、いかなる動機と経緯でベトナムを移住先として選び、ベトナム人コミュニティとどのように相互作用し、ホスト社会と融合・隔離・妥協しているのか。これが本研究の主な問題意識である。

Doo-Chul Kim, Hong-key Yoon, 2003, "Reality in Paradise: A Pilot Study of Korean Immigrants in New Zealand using the 1996 Census", in Ishikawa, Y. and Montanari, A. (eds.): *The New Geography of Human Mobility: Inequality Trends?*, Home of Geography : 85-102.

2. 研究の目的

このような問題意識のもとで、本研究では特にホストコミュニティ側からの調査と空間的隔離と社会的隔離との関係に関する調査に多くの時間を割いてきたが、今回の報告は紙面の制約のため、2013年4月から6月にかけて実施したアンケート調査（有効回答数582）の結果から、ホーチミン市に居住する韓国系ディアスポラの属性と彼らの定住意識に焦点を当てて報告したい。

なお、本研究の成果は、グローバル化の進展に伴う国内の社会格差の拡大が国際人口移動により一時的に回避されることを示唆するものであり、国内の変化をグローバルな視点で捉える枠組みを提供するものと考えられる。

3. 研究の方法

報告者は2009年11月から2ヶ月間2011年から2013年にかけて、ホーチミン市の韓国系コミュニティと、韓国系との雇用ないし取引関係のあるベトナム人を対象に参与観察と深層インタビューを実施してきた。また、2013年4月から6月にかけて「ホーチミン市の韓国系移民の実態調査」を実施し、582人からの有効回答を得た。アンケートの配付と回収は、雪だるま式と各種団体への依頼を並行し、ホーチミン市に住んでいる高校生以上のすべての韓国系を対象にしたが、駐在員およびその家族のように帰国予定が決まっている人々は対象外とした。

4. 研究成果

ホーチミン市に居住する韓国系ディアスポラの属性：回答者の属性をみると、年齢は全体的にバランス良く分布しているが、40代が31%とやや多く、性別は男性が74%と高いが、これは製造業従事者が多い母集団を反映した結果であるとみられる。職業は、自営業が25%と高く、会社経営（21%）と会社

員（16%）がそれを次ぐ。ベトナムでの居住期間は5年未満が約52%で、10年以上は20%に過ぎない。ベトナムへの移住目的は、「新たなビジネスの機会を求めて」が33%と最も多く、そのほか就業目的の移住を含めると60%に上る。一方、子供の教育を移住理由として挙げている人は1%に過ぎない。ベトナム語能力はみると、片言の会話程度の初級レベルが51%と最も多く、日常会話が十分できる程度は28%に過ぎない。他方、ベトナム生活への満足度をみると、ある程度満足（48%）と大変満足が（12%）を合わせると約60%の回答者がベトナム生活に満足していることがわかる。ホーチミン市における居住地域をみると、ホーチミン市の南に1990年代中盤に開発された、新興外国人集中地区であるPhu My Hung地区に約63%が集住し、次に空港近辺のThang Long地区に19%が住んでおり、空間的な隔離が進んでいることがわかる。ビザは約半数が1年未満の短期滞在の在留資格であるが、74%の回答者が家族と一緒に暮らしている。一方、回答者の中には、韓国系とベトナム人のカップルで形成する「韓系家族」が23%含まれているが、これは「韓系家族」の親睦団体にもアンケートを依頼したため、母集団の比率よりはやや多く含まれていると考えられる。また、このような標本の偏りは後述する韓国系ディアスポラの定住意識の結果にも影響すると思われる。

では、このように滞在歴も相対的に短く、現地の言語にも不自由な韓国系ディアスポラは仕事や日常的に必要な情報をどこから得ているのだろうか。表1は韓国系ディアスポラの情報源を示したものであるが、業務関連や日常生活を問わず、彼らの情報源は圧倒的に韓国系コミュニティが多く、ホスト・コミュニティから情報を得ているケースは業

務関連，日常生活のいずれも8%未満であることが判明された。しかし，病気の時に主に利用する病院を聞くと，32%がベトナム人病院を利用すると回答しており，その際はベトナム人知人に同行してもらったことが多いと言う。このようにホーチミン市に住んでいる韓国人ディアスポラはホストコミュニティと社会的にも空間的にも隔離されながらも，限られた接点で妥協し，隔離と同化を繰り返していると考えられる。

表1. 韓国人ディアスポラの情報源

	業務関連 情報源		生活関連 情報源	
	件数	割合	件数	割合
韓国語情報誌	240	26%	460	39%
韓国系インターネット	99	11%	260	22%
韓人会	19	2%	12	1%
韓国商工会	31	3%	4	0%
韓国人知り合い	63	7%	88	7%
ベトナム人知り合い	37	4%	30	3%
ベトナム行政機関	12	1%	3	0%
ベトナム新聞放送	26	3%	20	2%
関連業界の集まり	215	23%	50	4%
韓国人コミュニティの噂	178	19%	241	20%
その他	10	1%	9	1%
計	930	100%	1177	100%

* 複数回答

ホーチミン市に居住する韓国人ディアスポラの定住意識：上記の属性を持つホーチミン市に居住する韓国人ディアスポラの定住意識を表2からみると，「韓ベ家族」は72%が自分自身を移民と認識しているのに対して，そうでない場合は9%しか移民として認識していない。しかし，このような彼らの定住意識は，ビザなどの法的地位や言語能力，ベトナム生活への満足度とは必ずしも関連しないので興味深い。

表2. ホーチミン市・韓国人ディアスポラの定住意識

	移民	移住	長期滞在	一時滞在	計
韓ベ家族	97	25	10	2	134
韓ベ家族ではない	38	154	162	84	438
計	135	179	172	86	572

* 移民：生活，経済基盤のほとんどがベトナムにあり，韓国に帰る予定がない。移住：生活，経済基盤の一部がベトナムにあり，いずれかは韓国に帰る予定である。長期滞在：当分はベトナムで住むつもりで，具体的な帰国の予定はない。一時滞在：ベトナムで住む期間が限られており，5年以内に帰国の予定。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

土屋純・神谷浩夫・金 どう哲、ホーチミンで働く日本人女性の就業状況と生活環境、都市地理学、査読有、6、2012、16-28.

〔学会発表〕(計 1 件)

金 どう哲、ベトナムにおける韓国人ディアスポラの融合・隔離・妥協、人文地理学会、2013年11月10日、大阪市立大学.

〔図書〕(計 1 件)

金 どう哲、丸善、人文地理学会(編)『人文地理学事典』の「開発と地理学」を分担執筆、2013、490-491.

6. 研究組織

(1)研究代表者

金 どう哲 (KIM, DOO-CHUL)

岡山大学・大学院環境生命科学研究科・教授
研究者番号：10281974